平成２２年３月３日

一般社団法人廃棄物資源循環学会
正会員各位

一般社団法人廃棄物資源循環学会
選挙管理委員会委員長

一般社団法人廃棄物資源循環学会第１１期役員（理事･監事）選挙の実施について

一般社団法人廃棄物資源循環学会定款第１７条第１項及び一般社団法人廃棄物資源循環学会役員候補者選任に関する規程にもとづき、一般社団法人廃棄物資源循環学会第１１期役員（理事･監事）選挙を下記要綱により実施いたします。

なお、監事につきましては、選挙候補者の数が監事候補者の定数（２名）を超えなかったため、役員候補者選任に関する規程第７条により投票は行いません。

会員各位のご協力をお願いいたします。

投票要綱

１　投票期間　　平成２２年３月３日（水）～平成２２年３月２５日（木）

２　投票締切日　　平成２２年３月２５日（木）　必着

３　開票日　　平成２２年３月２６日（金）

４　候補者名簿　　一般社団法人廃棄物資源循環学会第１１期役員（理事･監事）選挙候補者名簿は、裏面のとおりです。

この名簿は、役員候補者選任に関する規程第４条による立候補者について、資格審査し選挙管理委員会で作成しました。なお、名簿記載順は、選挙管理委員会で候補者に受付順に番号を振り、その番号により抽選機で抽選し決定いたしました。

５　選挙権者　　この選挙の選挙権者は、役員候補者選任に関する規程第４条第４項にもとづき、平成２１年９月３０日現在において平成２１年度までの会費を納入している正会員です。

６　投票方法
・投票は、同封の投票用紙に限ります。投票用紙以外の投票は無効とします。
・選任したい候補者について、投票用紙に記載されている候補者名の右欄「投票欄」に〇印をして下さい。〇印以外の記載があった場合は無効とします。
・投票数は、理事候補について１６名以内です。この数を超えて投票された場合は、投票された票全てが無効となります。
・監事候補については、投票は行いません。
・投票は、無記名です。

７　注意事項　　以下の各項目に反する場合は、投票が無効になりますのでご注意下さい。
・投票用紙は、必ず同封の投票用封筒を使用して郵送して下さい。
・一投票用封筒につき一投票用紙として下さい。投票者の勤務先等が同じ場合でもまとめずに、個々に出して下さい。
・投票用紙の投票欄以外のところに〇印をしないでください。
・**投票用封筒には、投票用紙以外のものを入れないで下さい。**

◎　学会ホームページに、立候補者の所信が掲載されています。（http://www.jsmcwm.or.jp）

# 一般社団法人廃棄物資源循環学会第１１期役員選挙立候補者名簿

| 番　号 | 氏　　名 | 所　　属 | 会　員　区　分 |
|---|---|---|---|
| 1 | 由田　秀人 | 財団法人日本環境衛生センター | 公益団体 |
| 2 | 松藤　敏彦 | 北海道大学 | 大学 |
| 3 | 北脇　秀敏 | 東洋大学 | 大学 |
| 4 | 田中　綾子 | 福岡大学 | 大学 |
| 5 | 貫上　佳則 | 大阪市立大学 | 大学 |
| 6 | 臼井　直人 | 大成建設株式会社 | ゼネコン |
| 7 | 山田　正人 | 独立行政法人国立環境研究所 | 国立研究機関 |
| 8 | 中村　一夫 | 財団法人京都高度技術研究所 | 地方研究機関 |
| 9 | 横山　　隆 | ＪＦＥエンジニアリング株式会社 | メーカー・エンジニアリング |
| １０ | 吉岡　敏明 | 東北大学 | 大学 |
| １１ | 和田　安彦 | 関西大学 | 大学 |
| １２ | 島岡　隆行 | 九州大学 | 大学 |
| １３ | 酒井　伸一 | 京都大学 | 大学 |
| １４ | 高見澤一裕 | 岐阜大学 | 大学 |
| １５ | 貴田　晶子 | 独立行政法人国立環境研究所 | 国立研究機関 |
| １６ | 山川　　肇 | 京都府立大学 | 大学 |
| １７ | 長田　守弘 | 新日鉄エンジニアリング株式会社 | メーカー・エンジニアリング |
| １８ | 川本　克也 | 独立行政法人国立環境研究所 | 国立研究機関 |
| １９ | 鮫島　良二 | 株式会社タクマ | メーカー・エンジニアリング |
| ２０ | 片柳　健一 | 株式会社環境管理センター | コンサルタント |

【理事(定数　１６名)】

| 番号 | 氏　　名 | 所　　属 | 会　員　区　分 |
|---|---|---|---|
| 1 | 八木　美雄 | 財団法人　廃棄物研究財団 | 公益団体 |
| 2 | 峠　　和男 | 株式会社　大林組 | ゼネコン |

【監事(定数　２名)】

◎　廃棄物資源循環学会ホームページに、立候補者の所信が掲載されています。
(http://www.jsmcwm.or.jp/)

# 廃棄物資源循環学会第11期役員選挙　立候補者所信

(選挙管理委員会における抽選順)

【理事立候補者】

1　由田　秀人(財団法人日本環境衛生センター)

このたび、坂本弘道様より御要請があり、また、多くの推薦者の方から、御推薦をいただくことができましたので、理事に立候補させていただくこととさせていただきました。私は、これまで行政分野での仕事が長く、学際的な分野では素人ありますが、他分野から学際的分野にかかわることも、重要ではないかと思っております。少しでもお役に立てればと思っています。

2　松藤　敏彦（北海道大学)

これまでの学会活動は、「会員のため」という範囲を抜け出ていない。社会における学会の役割と責任を認識し、積極的に情報発信・啓蒙・提言ができる学会を目指す必要がある。そのために、1)個々の研究発表の場にとどまらず相互の議論を促進し、2)活動の範囲を産廃分野に広げ、他組織との協力も進め、3)知見を集約して学会の「知」をまとめて外部への発信・提案する学会を目指したい。

3　北脇　秀敏（東洋大学）

私は、１９９０年に廃棄物学会会員となって以来、理事、評議員，国際委員会委員長など１２の役職を経験してきました。その過程で気づいたことは、世界のグローバル化の中で日本の廃棄物処理技術を世界に普及させ、同時に廃棄物分野における途上国支援を行うという廃棄物分野の国際化の重要性であります。研究のみならず環境ビジネスが重要視される中、我が国は先進国および途上国双方との連携を深めていく必要があると考えています。今般廃棄物資源循環学会理事候補として立候補するにあたり廃棄物資源循環学会のさらなる国際化に貢献することを公約として掲げたいと考えます。

4　田中　綾子（福岡大学）

私の学会本部活動の経験は、第7回および第17回廃棄物学会研究発表会実行委員しかありませんが、九州支部においては設立当初から幹事として支部運営にかかわってきました。また、埋立部会や試験検査法部会に参画し、最終処分場の微生物学的安定化や浸出水の毒性試験法等の研究を行ってきました。この間、沢山の元気な市民グループ、女性および若手研究者にお会いしました。しかし、男女共同参画社会基本法の下、女性研究者の拡大、環境保全分野における女性の参画への取り組みが推進されている現在でも、本学会に参画している女性および若手研究者の数は少なく、情報交換が十分にできていません。今

回、廃棄物資源循環学会理事に立候補するに当たっての私の公約として、女性研究者間の連携強化と市民団体とのネットワークの構築、そして若手研究者 、学会員の拡充を挙げたいと思います。

5　貫上　佳則（大阪市立大学）

物質循環と廃棄物管理に関する学の体系化、社会に対する先導的役割、および循環型社会の形成と廃棄物問題の解決という当学会の使命を果たせるように、若い世代の人材育成や他分野領域との連携、学会組織の強化などにより、学会全体のさらなる活性化を目指していきたいと思います。応援のほどよろしくお願いいたします。

6　臼井　直人（大成建設株式会社）

私は、学会発足当初より廃棄物計画部会に参加し、また、平成 14 年度から 4 年間企画委員会で学会に貢献してまいりました。この度、学会の運営に貢献できればと考え立候補いたしました。研究発表会、研究部会および企画委員会で皆様にお世話になり、これらの経験を生かし、学会の活動にできるだけ多くの方々が参加でき、より活性化されるよう、推進していきたいと考えています。民間企業の代表として関係する方々に有益な学会活動ができるよう積極的に学会の活動に貢献したいと考えておりますので、よろしくお願いしします。

7　山田　正人（独立行政法人国立環境研究所）

廃棄物資源循環学会を「学」として位置づけ、学会を多様な立場での知が集まり、交流できる場にすることが私の基本的な所信です。第 10 期では国際委員会副委員長を拝命しました。引き続き 10 余年の交流がある韓国廃棄物学会との連携を軸とし、年会における国際セッションやアジア太平洋廃棄物専門家会議等を通して、アジアの知が交流できるような活動ができればと思います。また、若手の会は既に韓国やＩWWGとの連携を始めています。若い力は学会を動かす大切な推進力です。引き続きお手伝いができればと思います。さらに学会にとって支部活動は大きな力です。現在支部のない関東に支部を立ち上げることが新たな所信です。

8　中村　一夫（財団法人京都高度技術研究所）

持続可能な社会に向けて低炭素社会や循環型社会の具体化が強く叫ばれている今日、法人化された廃棄物資源循環学会の果たす役割の重要性が増して来ています。従って、今後、身近なごみ問題に対して、多くの市民や事業者さらには自治体担当者に向けて、学術的な立場から具体的な情報発信や提言をより積極的に行い、より多くの方々の共感や参画や得られる廃棄物資源循環学会となるように、最前線の廃棄物行政に携わってきた自治体出身者の立場から取り組んで行きたい。

9　横山　隆（ＪＦＥエンジニアリング株式会社）

私は、入社以来 34 年にわたり、焼却、ガス化などのサーマルリサイクルを中心に廃棄物処理・リサイクル分野全般の営業、開発、設計、建設、アフターサービスに携わってきました。また、当社及びグループ各社は廃棄物処理施設のＯ＆Ｍ、リサイクル事業にも積極的に取り組んでいます。これまでの経験を生かすと共に、現在の経済状況の激しい変化と廃棄物処理及びエネルギー回収の重要性を考慮しつつ、環境維持・向上を目指し、学会の更なる発展に寄与したいと考えます。特に日本の技術の先進性に関する情報を発信し、地球環境の廃棄物問題の解決ならびに当学会のステータス向上に貢献したいと思います。

10　吉岡　敏明（東北大学）

学会としての意義は、高い学術性の保持とその社会還元であります。本会は、学術研究と社会との関わりが特に強い学会であり、今後、学術性・社会性・国際性と支部活動の活性化を益々向上させ、会の地位をより一層高めることが求められています。そのためには、会を構成する産官学と一般市民との連携を深めるツールとなっている研究発表会や各々の立場での論文誌、広報誌等の一層の充実と支部との強い連携を図っていきたいと思っています。

11　和田　安彦（関西大学）

私は廃棄物資源循環学会のさらなる活性化を図り、会員の皆様に、より有益な情報提供、情報交換の学会にし、若手研究者の人材育成をしたく、理事に立候補いたします。

１．廃棄物資源循環学会の会員有益情報の提供、情報交換の場の増強
２．廃棄物資源循環学会の若手研究者の人財育成と戦力強化
３．廃棄物資源循環関連産業の進展とパイの拡大施策の強化

12　島岡　隆行（九州大学）

20 年間に及ぶ学会の活動は、廃棄物資源循環に係る問題解決に多大なる貢献をした。世代交代がなされようとしている中において、学会として知見の集積と廃棄物学としての体系化を図りたい。具体的には、学会からの出版物の発行、試験法の提示等を一層推進したい。このことは、廃棄物研究者を増やし、市民の廃棄物への理解を深め、学会の活性化へと繋がる。国際委員会等を通して、東アジアの廃棄物資源循環研究のためのネットワーク構築に貢献したい。また、九州支部会員としての立候補を意識し、支部の意見を本部に汲み上げ、また本部の意向を支部に的確に伝えることなどによって、支部活動を活性化したい。

13　酒井　伸一（京都大学）

20 年の歴史を重ねた廃棄物資源循環学会､次への一歩として第 10 期にはじめた本格的

な研究調査事業の受託と学会規格への取り組みを結実させることをめざします。こうした取り組みを財政基盤の強化につなげるために、企画展開力の強化をはかり、参加型の広報システムを創らねばなりません。市民社会との接点をより増やすという意味もあります。そして、学会としての基盤である論文誌や学会誌といった情報プラットホームは、電子化への対応を図りつつ、倫理的課題にも対処していかねばなりません。こうした次の一手を実行しつつ、ごみの管理とモノの循環や使い方に関するが学術貢献を中心に据えた活動を推進したいと思います。

14　高見澤　一裕（岐阜大学）

学会とは、学問や研究に携っている人たちが、自らの研究成果を発表し、その科学的な意義を公開の中で検討する場である。学会は会員に成果の発表と交流を深める場を提供することが役割である。廃棄物資源循環学会は、前者として年会と論文誌、後者として年会と学会誌、さらに広報と普及の場としてＣ＆Ｇを有しており、学会本来の機能を果たしている。今後は、研究成果の質の向上ときめ細かな成果の普及が発展に繋がる。それには、英文誌が current content に未掲載であることの改善と部会・支部活動の強化であると考えている。私は、学会発足時から学会発表、論文執筆はじめ東海北陸支部役員、編集委員や研究部会長を務めている。

15　貴田　晶子（独立行政法人国立環境研究所）

第 10 期に引き続き理事立候補いたしました。第 10 期では編集委員長をおおせつかりました。和文論文誌の電子化・アーカイブ化、英文誌の季刊化、学会誌の新たな装いでの発行等を今期行ってまいりましたが、第 11 期では電子化へのスムーズな移行が求められます。また法人となった学会において初めての受託事業を推進する役割も担いましたが、第 11 期も継続して関与する所存です。財政厳しい中、事務局業務の合理化・効率化。法人化による変更への対応等、事務局体制のサポートも理事としての重要な課題と考え、継続していきたいと思っております。（第 10 期理事会・編集委員会出席率 100%）

16　山川　肇（京都府立大学）

廃棄物の勉強を始めてまもなく、私は学生としてこの学会に参加しました。そして多くの方に出会い、多くのことを学ばせていただきました。これからも、縁あって廃棄物・資源循環の問題にかかわることになった学生や市民の方々にとって、もちろん多くの専門家の方々にとっても、同様に有意義な場であって欲しいと思います。

私はこれまで、編集幹事会、Ｃ＆Ｇ編集、研究委員会、社会経済部会、消費者市民研究部会、将来構想策定などの活動に係わってきました。もしも理事に当選しましたら、この学会が広く社会に開かれ、未来に開かれた学会として発展するよう、企画・編集・研究部会の学会活動に更に尽力するつもりです。よろしくお願いします。

17　長田　守弘（新日鉄エンジニアリング株式会社）

廃棄物資源循環学会は名称を新たにし、一般社団法人化を実現しましたが、経済情勢の厳しい中で会員数減少や財政問題等多くの課題を抱えています。私は廃棄物処理施設メーカを代表する立場から積極的に学会活動に参画し、これらの諸課題を解決し学会の発展に貢献すべく前期理事を務めてきましたが、以下の所信を掲げ引き続き第 11 期の理事に立候補することとしました。①産官学及び市民が連携し循環型社会形成と廃棄物問題解決を目指し活動を展開する。②会員にとって魅力のある学会とすることで会員増強を図るとともに効率的運営により財政基盤を強化する。③海外との積極的な交流を図るとともに若手技術者・研究者に活躍の場を提供する。

18　川本　克也（独立行政法人国立環境研究所）

私は現第 10 期理事として、企画運営委員会副委員長・企画部会長の任にあり、部会メンバーとともに廃棄物資源循環学会シンポジウム、技術セミナー等の企画立案と運営を中心に務めて参りました。今般、第 11 期役員に立候補するにあたりましては、国内外の社会の急激な変化を背景に廃棄物学あるいは広く学術をとりまく状況が変革を迫られていることを認識し、既存の価値観を引きずらない柔軟な発想のもとに、実社会から求められる廃棄物資源循環学会を作り出していくため、尽力する所存です。

19　鮫島　良二（株式会社タクマ）

廃棄物資源循環学会は、産・官・学・民がそれぞれの立場で、あるいは連携して参加できる学会であり、学会の発展は廃棄物に係る社会問題の解決、ひいては地球環境の保全に繋がるものと考えています。

私は企業の立場で廃棄物処理技術の発展に係ってきました。学会理事選には初めて立候補いたしますが、企業での経験および廃棄物計画部会で活動させていただいた経験を活かし、学会の発展に積極的に取組み、学会員全員が参加できる廃棄物資源循環学会となるよう頑張る所存です。

20　片柳　健一（株式会社環境管理センター）

私は、第 10 期においては企画運営委員会委員と当委員会に設置されている広報部会長を務めさせていただき、部会委員の協力を得て、学会ニュースの発行、法人化に伴う学会ホームページの改訂、メールニュースシステムの構築等を行いました。第 11 期は引き続き学会広報の更なる充実を図るとともに、会員の増強に努めます。また、学会収入に見合った効率的な会員へのサービス提供を図るとともに、他の廃棄物関連団体との連携を強化し、社会における３Ｒ推進、廃棄物の適正処理、環境保全の諸活動に当学会がさらに貢献できる場作りを積極的に行ってまいります。

【監事立候補者】

1　八木　美雄（財団法人廃棄物研究財団）

財団法人廃棄物研究財団等公益法人における 10 年余の業務経験を活かし、監事の立場から一般社団法人廃棄物資源循環学会の業務執行の円滑化・適正化に貢献して参りたい。

2　峠　和男（株式会社大林組）

学会活動には、発足した平成元年から種々の場面で参加してきました。また、平成 20 年、21 年の２年間は、理事として活動させていただきました。この間、法人化、パンフレットの作成、活動活性化のメール活用システムなどの業務を担当させていただきました。本学会は、社会に貢献する素晴しい団体と考えておりますが、まだまだ潜在能力を発揮するものと考えます。このたび理事の任を終了し監事に立候補したのは、本学会が更に健全に活性化され、社会に貢献することを支援したいという所信によるものであります。